

## 『思考するカンパニー』（増補版）書評・感想集

AMITA Booksに掲載されている電子書籍『思考するカンパニー』（増補版）をお読みいただいた方々の書評・感想です。まだお読みになっていない方は、以下URLから読者登録いただけます（無料）。

AMITA Books 電子書籍ダウンロード申し込みフォーム：<https://business.form-mailer.jp/fms/ff84e6b222217>

### ■ ピーター D. ピーダーセン ソーシャルデザイナー

ビジネスに関する哲学書を読ませていただいた気持ちです。ビジネスを着実に進めながら、ここまで深く物事を考える人はほとんどいないと思います。利益のために理想を捨てることはビジネス界では蔓延していますが、熊野さんはむしろビジネスを通じてより高い理想を具現化しようとしておられます。その姿とご努力に脱帽、です。以下に、いくつかの感想や私の考えを記します。取り留めのないもので恐縮です。

この本の根幹を成すところは、「利他的モデル」や「利他的行動」をいかにして奨励するないし、集めて大きな力にしていくかであると感じます。私も利潤動機がすべてではないと思いますし、確かに脆くて儂い利他的欲求を集める仕組みが必要だと思います。

同時に、これまでの仕事や LOHAS 調査などを実施して感じたことに、「利己的行動をサステナブルにしなければならない」ということがあります。あるいは、「サステナブルな行動が利己的行動とイコールである経済の仕組みが欠かせない」といってもよいかもしれません。それは、つまり、経済や社会のルールを変えることにより、サステナブルな行動・購買が経済的にもメリットあるものにするということです。このような社会の仕組みや新たな市場創造は北ヨーロッパではある程度進んでいますが、日本ではまだ「LOHAS 的に暮らす」ことには非常なコストと手間がかかり、忙しく収入にも余裕がない多くの人々にとっては難しいことです。ほとんどの人が折角持っている「利他的欲求」は、社会・経済の仕組みの問題によって表現することができないのも現状だと思います。

企業と接しても同じようなことを感じてきました。日本の企業は結構マジメだし、中には環境に本当に一生懸命に取り組みたい担当者も経営者もいます。しかし、結局は現在のグローバル市場の競争に負けたり、あるいは、ある一定のレベル以上の行動をとると株式市場から歓迎されなかったりするため、企業の真の sustainable transformation ができません。

最終的には、グローバル資本主義のルールを変え、sustainable is standard という世の中

を創らないといけないと思います。個人的には、この挑戦のキーワードは、**sustainable market economy** の創造ではないかと思っています。いま、私が本来の力を発揮できているならば、世界各地の友人（環境・サステナビリティ分野）とも連携を図りつつ、日本を舞台として、この新しい「持続可能な市場経済」のルールづくりに取り組みたいところです。

共感主義という言葉が熊野さんが使われています。これにも大いに賛同します。実は、7-8年前だったと思いますが、夢の中で、「人類はホモ・ソシエンスにならない」という不思議な言葉を教えてもらいました。聴いたことのない言葉でしたし、試しに Web サイトで検索してみたら 1 ヒットでした。しかし、直感的にはすぐにその意味がわかりました。いまでは、「共鳴、協働、共創できるヒト=ホモ・ソシエンス」へと、私たちは文化的・精神的な進化を加速させなければ、人類が直面している主要な課題を解決することはできないと思っています。これは、単なる哲学ではなく、熊野さんの本にも触れられているように、具体的な行動へと結びつける必要があります。これも、経済の在り方と合わせて、私が今後追求していきたいテーマの一つです。

本の最後の方に社会的起業家 × 地域興しのことについて書かれています。デンマークの **folkehoejskole**（国民高等学校）にも電話で触れられていました。実際にあるコミュニティを創造し（あるいは村を再生し）、そこで利他的モデルを実践するのも素晴らしいことですが、熊野さんの発想力と展開力をもってすれば、まさにモデルとして横の展開が可能な「学校」を開設していくのが、最も強力な変革のメカニズムになるのではないかと思います。例えば、

社会的企業 × 地域興し × 持続可能性の技術（ヒューマン/ソフトテクノロジー含む）

をテーマとした学校のモデルをつくり、少しずつ同じ学校が各地（日本のみならず、いずれはアジア等）に広まることを目標とされてはいかがでしょうか？1800年代半ばにできたデンマークの **folkehoejskole** は、いまや、北欧5カ国で約400校あると言われています。ただし、初期から国の支援も（紐つきでない形で）ありました。

市場と社会の関係性について。北欧の社会モデルがそれなりに人間的にも、経済的にもうまく行っている背景には、「市場の力」と「社会による方向づけ」がほどよくかみ合っているというか、その間のバランスがとれていることがあると思います。例えばデンマークは純粋な市場経済でも、もちろん社会主義の経済でもなく、**mixed economy** というモデルの下、成功している試みだと思います。市場やビジネスの力だけで社会をしかるべき方向に変えられるとは思いません。ただし、現在の日本において、官僚主義が強く、また政治（家）も国の将来ビジョンを描けないでいるなか、確かに志ある起業家・企業家に期待をしたい

ところがあります。

以上、雑多なものですが、私の感想です。熊野さんの本や思想をどのようにして多くの方々に広められるかが一つの挑戦だと思います。まじめな本はなかなか売れませんので、ここでもやはり横の展開が可能な”学びのメカニズム”(学校等)がよいのではないかと思います。

#### ■静岡県 大学生 天野浩史氏 男性 (20代)

今では環境分野の企業の中でも先進的な取り組みを展開される、アマタHDの代表取締役の熊野氏の、これから求められる企業、事業家についてまとめられた本です。とにかく面白い！ただ自身の意見をバンバン言うというよりも、歴史を読み返し、「今は応仁の乱が終わって、戦国時代を迎えた時代に似ている」という視点から展開される考え方は、説得力がありました。新たな産業革命を、起こしてくれるかも…。

#### ■東京都 無職 (元会社経営) 匿名 男性 (40代)

##### 「閉塞感の正体」

『思考するカンパニー』拝読しました。自身もここ十年つらつらと思索してきたことを、ダイナミックに実践されていて素晴らしく思いました。

坂本龍馬以後、近代化を進めてきた日本。破壊と創造なんてカッコいい話もあるけど、近代化の象徴＝ダイナマイト、これが資本主義の名の下に、資本とは水と油、プライスレス、コミュニティーの崩壊を進めてきた。生き残るために、居場所を壊してきたのだ。もっと、もっとと、肥大化するエゴ、エコもエゴエコ、条件付けのエコ。

拝読させて頂いているうちに、イヴァンイリイチの「生きる意味」を思い起こしていました。脱近代、脱学校、脱病院。真のコミュニティーは、コンヴィヴィアリティある関係性、自律、分散、互惠。

復興商店街に多額の寄付金が寄せられ商店街復活に歓喜したのは、つかの間、間もなく大型ショッピングセンターが出来、復興商店街は廃れる。で、ここにまた孤独が生じる。コミュニティーとマーケットは、平行線なのだろうか？平成の楽市楽座は、産直市場止まりなのか？

自身もライフワークにしていきたいと思っていた時期に「利他の事業化」は、しっくりくるテーマでした。信頼、愛情、共感という価値を資本と考え、これを軸にしてスタイルを作っていく。協業というものでない、同志的な会社の枠組みに囚われない有機体。つながりのデザイン、ここに未来があるのだと思います。

資本だけでない尺度、環境、社会貢献をさらに進めた価値の創造に企業人として関わるという覚悟に非常に共感しました。環境というと、北欧などのイメージが強いですが、様々な価値を西洋から受け入れ、日本モデルにしていける DNA が日本人には息づいていると思います。私はその肝が「発酵」と思い、事業化を目指しましたが、五十前の大病を経験して、一旦中止して、ようやく全快の兆しが見えてきたので、いただいた命と再認識して生きて行こうと思っています。

全て手放した今見えることは、過去に戻るのではなく、近代化の恩恵も活かした未来。多様性の顕われた都市、さまざまな循環のスタイル。思考と感情が、共振したその姿。大切なことは、出発点と出口を同時に手がけていくことだと思います。

生産即消費。洗練された和スタイルの世界発信、てなところ。ちょっと書かれていることが幅広く、興味深いので、まだまとまりきっていませんが、すごく可能性にあることを机上の空論ではなく、現実に実践されていることに、深くリスペクトします。自分に関われるところがあれば関わりたいなあと思いました。

#### ■会社員 やまちゃん (ペンネーム) 男性 (50代)

たいへん力強い文章で、二度、目を通しました。一度目は、環境問題の観点から、一気に読了しました。私も一応、環境の専門家と自負していましたが、著者（熊野会長様）の造詣の深さに頭の下がる思いでした。私の知識は広く浅くであり、掘り下げが不足しているのと、思想がないと痛感しました。

二度目は、「価値とは何か」、「持続可能な社会のあるべき姿」をキーワードに少しペースを落として、読みました。たいへん難しい課題であり、宗教と同様、万人が納得する答えを出すことは不可能だと思います。しかし、ある程度、支持されるポイント、落とし所とでもいうのでしょうか、そういうものがぼんやりと見えてきた気がします。気がするので、断言はできません。また、勘違いかも知れません。少なくとも、方向性が正しいことだけは間違いないと確信しました。後はどうやって行動に移すかということです。

元監督・野村克也氏の言葉に以下のようなものがあります（ヒンズー教の教えをアレンジしたと言われています）。

考えが変われば意識が変わる。  
意識が変われば行動が変わる。  
行動が変われば習慣が変わる。

習慣が変われば人格が変わる。  
人格が変われば運命が変わる。  
運命が変われば人生が変わる。

少なくとも3番目の習慣が変わるところまで、持続可能な社会の実現に向けて、国民全体が取り組む日が訪れることを期待します。閉塞感漂う日本において、日本そのものがBCP（事業継続計画）を発動しているのではないかと思う時があります。日が一瞬、悶々と過ごしている若者、サラリーマンには、ぜひ、本書を一読していただき、自らが国に対してどのように貢献できるのか、真剣に考えていただきたいと思います。正直なところ、私も救われた一人かも知れません。

このような会長様のもとで、一緒に仕事ができるアマタHDの社員の方が、とても羨ましく感じました。

#### ■福島県 農業 塩澤 靖浩氏 男性 (40代)

チェルノブイリの数十倍規模、過去最大の原発事故になる一歩手前で辛うじてとどまった福島原発。3.11以降、我々日本人は血も凍る思いで近代文明の行き詰まりを感じ取った。

著者熊野氏はこのような流れの中で思考を進め第7章を付け加えたのでしょう。「個人主義」にたいする「共感主義」の対比構図は緻密な分析と論理展開によるもので、なかなかここまでの具体的な提示をしている人間はいないと思います。しかし、熊野氏は研究者・政治家・思想家でなく事業家である。よって本書第7章は事業のマスタープランであり、現実の動きとなることに最大の意味がある。今後の熊野氏とアマタの動きに注目すべきでしょう。

#### ■会社員・男性 (40代)

非常に、独創的なかたちでこの時代を切り取っている方だと思いました。経営者であると同時に、哲学者でもある熊野さんの会社が、これからどのようなカンパニーとともに、どんな価値をつくっていくのだろうか？とワクワクします。願わくは、自分もその冒険に、何らかの形で関われば、と思いました。

#### ■会社員・男性 (20代)

生まれた時からモノに囲まれ、生まれた時から何不自由なく、生まれた時から平和に暮らせる私と同世代の人たちは、実は生まれながらにして同じ問いを持って生まれてきます。それは、この本にある「本当の価値とは何か？」という問いです。「何でもある」、「何でも出来る」、「何をしてもいい」私たちは、自由という名の不自由にいつも苦しまされています。

「自分とはどういう人間なのか?」「自分はどんな風に生きたいのか?」「自分とは何なのか?」人が生きている限りつきまとう問いを早くから見つめられる環境にあることは、過去の先人のたまものではありませんが、現代の当事者である私たちには、先人たちの限定された不自由さをうらやましく思う時があります。

この本は、当たり前の中にある「本当の価値」に気づくことが出来る叢智の書です。情報に溢れる現代社会の中であって、自分にとって「本当の価値とは何か?」という問いは、様々な欲望や刺激で心が見えなくなってしまう時に、一筋の光を与えてくれる道しるべになります。

アマタホールディングス株式会社では、今後も、『思考するカンパニー』（増補版）についてご投稿いただいた書評・感想をアップしていきます。

まだお読みになっていない方は、ぜひ以下 URL から読者登録のうえ、お読みください。

**AMITA Books 電子書籍ダウンロード申し込みフォーム** : <https://business.form-mailer.jp/fms/ff84e6b222217>